

第1回苫小牧駅周辺ビジョン策定検討委員会

○事務局 ご都合により、出席がありませんでした学研ホールディングスの小早川仁様は、オンラインにて出席いただいておりますが、時間の都合上、ちょっと一言、自己紹介を兼ねまして、先にご挨拶とお話をいただければと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

○小早川委員 誠に申し訳ございません。学研の小早川でございます。

本日は、本来、そちらにお伺いして、皆様方とお顔を合わせていろいろと意見交換をしたかったんですが、オンラインの参加で大変失礼いたします。よろしく願いいたします。

学研は、多分、教育出版社というイメージが非常に強いかと思うんですが、今実は売上げの半分は福祉の事業になっております。

少子高齢化社会の中で、子育て支援施設や高齢者住宅や、介護施設、認知症のグループホーム、特に高齢者施設に関しては、日本で一番拠点数運営している会社でございます。

様々な官民連携のまちづくりにも挑戦していきまして、学研グループ全体よりも少子高齢社会の中でのまちづくりの発展ということで、IRもそのような発信の仕方をしていきます。最近で言いますと、大阪の吹田市や広島廿日市さんとも官民連携のまちづくりの拠点を一緒に整備して、運用を開始したりしております。

全国で様々なケースを経験させていただいております、よかった点や、逆に、失敗した点も見ておりますので、今回の検討委員会でそのような話をさせていただければなというふうに思っております。

個人的にも、昨年、苫小牧市にお伺いすることがありまして、ちょっと早めに着いたので、JRの駅で家族にお土産とかを買って帰ろうと思ったんですが、本当に何もなくて、セブンイレブンにちょっとだけお土産が売っているぐらいで、駅の周りにも、ちょっと歩いてみようと思って歩いたんですが、本当に何もなくて、ちょっとショックを受けた、個人的に観光客としてもショックを受けたので、ぜひ、今回の駅周辺ビジョンで、本当に訪れる人や市民の方がここにこういうものができてよかったと言ってもらえるようなまちづくりに何かしらの貢献ができるように努力してまいりますので、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

○事務局 小早川様、ありがとうございました。

それでは、市長からご挨拶を申し上げますので、よろしく願いいたします。

○市長 それでは、一言ご挨拶をさせていただきますが、まずは、先ほど委嘱状を交付させていただきました。この苫小牧にとっては大変重要なミッションの一つでありますけれども、皆様方には、お忙しい中、大変お世話になりました。まずはどうぞよろしく願いを申し上げたいと思います。

私は、この7月8日で市長職16年目を迎えることとなります。その最初から、1期目

のときから市民の皆さんに提起してきた問題があります。それは東西バランスの問題と中心市街地活性化の問題であります。

今この20年ないし30年、全国の地方都市が中心市街地の空洞化という現象に悩まされてまいりました。

一つ一つのまちは、都市構成基盤も違いますし、歴史も違いますので、一概に比較することは無理がありますが、しかし、苫小牧におきましても、この中心市街地問題というのは、大変大きな、これからの近未来に向けて重要な取組というふうに考えております。

紆余曲折、いろいろありましたけれども、お手元に都市再生コンセプトプランの資料があります。ここに至るまで、随分、時間はかかりましたし、市内外の有識者の皆さん方の様々なご意見をいただきながら、このプランを世に出したわけであります。

今これから我々が考えているのは、このプランに書かれている概念、考え方をいかに具現化していくのかという段階に入ってきているわけでありまして、その具現化プロセスの中で幾つかのコアをつくってきました。

その中の苫小牧駅前をこれからどう捉えて考えるかということ、これから皆さんにたくさんのご意見をいただきながら、一つの方向性をまとめていきたいというのが、この検討委員会ということになりますので、ぜひ、そんな苫小牧の悩める一番大きな課題ということでございますので、ぜひ、忌憚のないご意見をいただいて、実際に皆さん方が示していただいた方向性に向けて、具現化に向けて、ねじり鉢巻きをして頑張っていくのは我々行政の責任、役目でありますので、その道筋のようなものを少し皆さんからいただければありがたいというふうに思っております。

特に森先生は、老朽化した市民会館をどうリニューアルするのか、今市民文化ホールということで、場所も決まり、優先交渉権者も決まったところでありますが、最初にご苦労いただいたのが森先生で、市民にとってのサード・プレイスという概念をまとめていただいた経過があります。

森先生をはじめ、それぞれに苫小牧のまちづくりに関わっていただいている皆さん方ありますので、これから4回ないし5回ぐらい、この検討委員会を開きながら、一つの方向性をまとめていただくことになりますので、ぜひ、よろしくお願いを申し上げたいと思います。

私自身は、今日、ご挨拶の後、中座させていただくことになりますけれども、どこかで、一度また、いろんな議論にも参加したいというふうに思っておりますので、くれぐれもよろしくお願いを申し上げまして、冒頭のご挨拶に代えさせていただきます。

お世話になります。

○事務局 市長は、他の公務がございますので、退席させていただきます。

○市長 それでは、よろしくお願ひします。

○事務局 それでは、会議に入らせていただきます。

会議は次第に沿って進めてまいりますが、座長の選任まで、総合政策部長の町田が座長

を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

○総合政策部長 皆さん、こんにちは。総合政策部長の町田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、次第に従いまして、座長を選任したいと思います。

本委員会設置要綱第6条に基づき、本委員会に座長を置くことになってございます。

また、座長は委員の互選により決定することになってございます。この件に関しまして、事務局案をご提示したいと考えておりますが、いかがでしょうか。

(異議なし)

○総合政策部長 よろしいでしょうか。

そうしましたら、事務局案としまして、北海道大学大学院工学研究院、森教授を座長に推薦しますが、いかがでしょうか。

(異議なし)

○総合政策部長 異議がない場合、拍手をお願いしたいと思います。

(拍手)

○総合政策部長 ありがとうございます。それでは、森教授を座長に決定いたします。

ここからは、設置要綱第6条第3項に基づきまして、座長に進行をお願いいたします。森教授、よろしくお願いいたします。

○森座長 今座長に選んでいただきました北海道大学の森です。このたびは、どうぞよろしくお願いいたします。

先ほど、市長より少し触れていただきましたが、私、実はちょっと久しぶりに苫小牧にお邪魔させていただいておりますけれども、一番頻繁に来させていただいていたのは、市民ホールをどうやっていくのかという議論で、いわゆる基本の、最初の構想を議論する。その後、基本計画ということで、今回はPFI方式ということで、建物を造る方がちゃんと決まりましたけれども、骨格として、どういうふうな機能とか、建物というようなことの議論、委員の山口さんにもいろいろお手伝いいただいて、久しぶりにお会いしたんですけども、そのときに、やはり議論として大事にしていたのは、公共の事業にしろ、民間の事業にしろ、これから北海道、苫小牧さんに限らず、今を含めてですけれども、人口が減っていくと、経済が大きくなっていくような時代ではない中で、大事にすべきだなと思うのは、やはり市民の方々にとって、そこがどういう生活環境になるのかということがすごく大事ななというふうに思います。

この辺り、やはり再開発は、基本的に民間の事業なのでございますけれども、公共として、どういう方向性をまち全体として持つておくのかということは非常に大事な議論になりますし、もし公共的な立場が開発等に関わるのであれば、それが市民に対して、どう還元されるのかというようなところがすごく大事になると思うんです。そういったことも含めて、今回、駅前ビジョン、駅周辺ビジョンですけれども、これも駅前スポット的に議論が閉じる話では決してないと思いますので、その他のことも含めて、多角的に、まずは皆様と意見交換

をさせていただきたいなと思います。

ちょっと長くなりましたが、失礼しましたけれども、これからどうぞよろしくお願いたします。以降、着席で失礼させていただきます。

それでは、お手元資料の検討委員会の次第、1、2、3、4とありますが、まずは、私も含めて、この都市再生コンセプトプランというものを、皆さんは、もしかしたらお目を通していただいているので、基本おさらいしながら、その情報を基に、今日は、一つ論点を絞って、ディスカッションをするというよりは、まず、今それぞれの委員の皆さんが思っておられることを出していただいて、情報共有をするということにウエイトを置きたいなと思います。

それでは、事務局のほうから、お手元の資料を使いながら、駅周辺ビジョン、再生コンセプトプランについて説明をお願いいたします。

○未来創造戦略室 未来創造戦略室の林と申します。どうぞよろしくお願いたします。

私のほうから、都市再生コンセプトプラン、それから本駅周辺ビジョンの概要についてご説明をさせていただきたいなと思います。

座って説明をさせていただきます。

昨年の3月に策定しました苫小牧都市再生コンセプトプランでございますけれども、先ほど、市長の挨拶の中でもありましたけれども、本市の発展に向けました市全体のまちづくりの考え方、方向性を示しているものでございまして、このコンセプトプランを基に、様々な具現化に向けた取組を今進めているところでございます。

この今回の駅周辺ビジョンの策定につきましても、この都市再生コンセプトプランを前提とした考え方というところをまずはご承知おきいただきたいと思っておりますし、今日は少しお時間をいただきまして、このコンセプトプランの考え方、方向性というものをご説明したいと思っております。

ちょっと全体となるとボリュームが多いものですから、特に中心市街地に関連する内容を抜粋した形でご説明させていただきたいと思っておりますので、ぜひ、この機会に理解を深めていただきたいなというふうに思います。

初めに、5ページをご覧ください。

都市再生コンセプトプランの位置づけ、それから全体像になります。

この目的でございますけれども、本市のものづくり産業、それから港・空港を生かした本市の成長戦略の方向性を示したものとなっております。

また、環境と産業が共生する持続可能な都市の実現に向けて、この考え方を各施策に反映していくというのがこのコンセプトプランの位置づけとなっております。

また、全体の構成としましては、本市の現状分析、それから内外の事例調査、まちづくりの再生コンセプト、そして有識者会議等において尖った視点を反映、そしてフィージビリティスタディといいまして、実現可能性の調査、検証を行いまして、全体のコンセプトプランを取りまとめているという構成になってございます。

飛びまして、10ページをご覧ください。

ご承知おきの部分かとは思いますが、本市の概況としまして、人口動態の話でございます。人口については、少しずつではございますが、既に減少傾向に入っております。自然減の増加、社会増の減少というところが要因になっております。

これに対しましては、良質な雇用を増やすことによる転入者の増加、あるいは子育て環境を向上することにより、出生数の増加を目指すことが必要だということで考えてございます。

また、若年層の市外への流出等も非常に大きな影響としてございまして、市内雇用の充実、あるいは若者がチャレンジできる環境づくりが必要という視点も盛り込んでございます。

続きまして、11ページをご覧ください。

地域別の人口になりますが、こちらも市中心に近い地域については、人口が減少傾向にあるという数値として表れている。また、東部地域については増加が続いているということがグラフで出ているものでございます。

続きまして、18ページをご覧ください。

公共交通の概況としまして、これは鉄道の部分の話になりますけれども、全体の公共交通としまして、駅周辺にある苫小牧駅、中心部にある苫小牧駅につきましては、胆振地域の主要駅となっております。この苫小牧駅と、それから東側にある沼ノ端駅には特急が停車するという状況でございます。

また、市内には、錦岡、糸井、青葉の駅も西部にはございまして、これらには、普通列車が停車し、ただ、いずれにしても苫小牧駅での乗換えが必要というふうな状況であります。

また、苫小牧駅前につきましては、バス、あるいはタクシーという公共機関、交通機関も併設しておりまして、交通の結節点として重要なポイントにあるということを表してございます。

続いて、23ページをご覧ください。

中心市街地の概況ということで、市街地の空洞化の状況を表したものでございます。

左側の歩行者通行量の推移につきましては、平日、休日ともに減少傾向にあること。また、右のグラフでは空き家数の推移を表しておりますが、全道平均よりも高く、14%台で推移しているというグラフになってございます。

続いて、24ページをお願いいたします。

こちらは、駅前商店街の空洞化の状況ということで、現状と背景を見たものでございます。

商業の衰退としまして、高齢化による事業継承の滞り、あるいは居住人口の低下、減少、郊外大型店舗の進出があり、車社会の進展による人の流れの変化、こうしたことを受けまして、本市としましては、まちなか再生総合プロジェクト、CAPにおきまして、約10

年間取り組んでまいりましたが、旧サンプラザビル問題の長期化、継続的な誘客、消費につなげるシナリオが描けていないこと、あるいはエリアとしての取組につながっていないことが、現在としても原因があるということでございます。

続いて、25ページをご覧ください。

中心市街地の概況、これは解決のための方向性ということを入れてございます。

今お話ししたような、こうした負のループというのをどのようにして断ち切るのかがポイントとして書かれてございます。

それには、先進事例の取り入れ、あるいは市民の自発的動きを促す仕組み、周辺地権者の協力、高齢者社会の対応など、必要な解決のための方向性を述べているものでございます。

27ページをご覧ください。

中心市街地活性化への取組方式としまして、取組の状況を記載してございます。

これには交通でいきますと、駐車料金、公共交通の利便性というものが課題として挙げられておりまして、駐車場サービス、あるいは公共交通のサービスを向上することが解決案・方向性として、挙げておりますし、そのほか空き家、エリアマネジメント、事業継承としましても、それぞれの課題に対する解決案・方向性というものをここで記載しております。

また、その他としまして、「食と音楽のまち」を目指す、あるいは投資効果の検討というところが課題として挙げておりまして、それぞれ解決案・方向性というのも示してございますので、こうした視点も必要なのかなというふうに思います。

28ページをお願いいたします。

(仮称) 苫小牧市民ホール整備運営事業ということで、令和8年3月のオープン予定となっておりますが、先ほど来、お話に出ておりますとおり、メインテーマは、市民のサードプレイスということでございまして、今回の駅周辺ビジョンの概要にもお示ししておりますとおり、苫小牧駅から市民ホールへつなぐ動線というのが重要な要素というふうに捉えてございます。

31ページをご覧ください。

これは、「本市の現状分析のとりまとめ」の表でございます。

ご覧いただいておりますとおり、強みにつきましては、首都圏に近いダブルポート、産業拠点、それから冷涼な気候等が挙げられますし、逆に、弱みとしましては、人口減少、中心市街地の空洞化、構造上まちが分散するなどの弱みがございます。

一方で、機会としましては、ゼロカーボンの動き、それからデジタル化、地方創生などの全国的な動きを機会として捉えることができると考えておりまして、逆に脅威としましては、産業転換によるものづくり等への影響、あるいはコロナ禍による観光・飲食事業の減少というところが挙げられます。

総じて、強みや機会を活用し、弱みや脅威を克服、将来、住み続けられる長期展望に立

った取組が必要というふうな形になってございます。

飛んでいただきまして、43ページをお願いいたします。

目指すべき方向性と目標ということで、創造的、自走的、あるいは次世代産業の展開、デザイン力と働き方、価値観の変化、テクノロジーの活用、それから、ハイレベルな質的水準、北海道への貢献、地方都市再生のロールモデル、持続的進化、産業と環境が共生する持続可能な都市の実現というものを目指すべき方向性・目標として挙げてございます。

44ページをお願いいたします。

この方向性、目標に基づきまして、都市再生の三つのキーワードを掲げております。

三つのWとしまして、「Walk」「Water」「Work」ということで、中心市街地の再生、親水空間と次世代産業ということ、この三つのWをキーワードに交流人口の増加を目標として掲げているのがコンセプトプランの目標でございます。

45ページをお願いいたします。

コンセプトプランの構成要素となっておりまして、ウォーカブルなまちづくり、ウォーターフロントの魅力発信、次世代産業の展開、人材育成・多文化共生という4点を構成要素として挙げておりまして、46ページに、特にウォーカブルなまちづくりという部分につきましては、今回の中心市街地に大きく関わる部分かなと思います。

多機能コミュニティ拠点、歩きたくなるストリート、ワーケーション拠点、食と文化のあふれるまち、これらの要素を踏まえまして、駅から市民ホールと一体的に整備というコンセプトになっております。

この48ページに歩きたくなるストリアートの整備について書いておりますが、まちなかのコンセプトですとか、都市構造の変革、公共交通のネットワーク等々がこのストリアート整備には必要な要素ということで掲げてございます。

66ページをお願いいたします。

今お話しした中心市街地エリア、それから港を含むウォーターフロントエリアの連携ということで、例えばこういうエリア連携をした場合に、主要な結節点を幾つかポイントとしておりまして、これらを回遊動線として、例えば時代を象徴する空間建築物、あるいは市民のライフスタイルを考えながら、回遊動線を回遊する装置というのは、ハード、ソフト両面を用いながら出現させることができるのではないかとこの考え方でございます。

68ページには、特にこのウォーカブルな動線としまして、今お話ししたような考え方の中で、軸の結び方、あるいは歩行者・自動車道路などを考えながら、どうこの結節点を結ぶかという視点でございます。

最後になりますが、73ページから76ページには、先ほどの時代を象徴する建築物ということで、隈研吾先生に描いていただいたパースを載せております。

イメージでございますが、中心市街地、それからシンボルストリート、キラキラ公園というイメージをお示しし、これらをどう実現に向けて、このイメージに近づけていくかという視点も議論としてはいいのではないかと思います。というような形でまとめておりま

す。

コンセプトプランの説明については以上でございます。

続きまして、駅周辺ビジョンの概要についても簡単に触れさせていただきたいと思いません。

こちらのほうになりますけれども、駅周辺ビジョンの策定の目標としましては、今ご説明した都市再生コンセプトプランの具体的かつ持続可能な都市機能の在り方をまとめることを目標に掲げておりまして、ビジョンの位置づけとしましては、駅周辺の客観的かつ理想的な姿を事業性等も考慮しながら策定をするというもので、具体的な議論を進めるためのベースになるものと位置づけております。

2枚目になります。対象エリアとしましては、苫小牧駅周辺から（仮称）市民ホール周辺までの1キロ程の間の円形状の範囲をエリアとしておりまして、駅前につきましては、L字になりますけれども、ここについての考え方もしっかりとまとめていきたいという考え方でございます。

本検討委員会の進め方でございますが、後ほど、座長のほうからお話、進め方等もあるかと思いますが、議論のポイントとしましては、今お話しした対象エリア、苫小牧駅周辺の1キロにおける考え方、方向性、あるいはあるべき機能等について、様々なお立場から議論いただきまして、コンセプトの立案、検討を行うための内容をご議論いただきたいというふうに思っております。

年間のスケジュール、現時点の目安というふうに捉えていただきたいと思いますが、本日、4月27日に委員会を設置させていただき、今後、4回程度、全体で5回程度の検討会の開催を予定させていただいております。

進め方につきましては、現段階の案ということになりますので、今日のご議論を踏まえながら、今後の進め方を協議させていただきたいなというふうに思っております。

最後に、策定のスケジュールは、今お話ししたような内容を表したものでございますので、ご覧いただければというふうに思います。

長くなりましたが、私の説明は以上でございます。

○森座長 ご説明ありがとうございました。

それでは、今回、1回目ということですので、特に縛りなく、皆様のご意見をまず最初にお聞きしたい、お伺いしたいなと思います。

このコンセプトプランのここについてどう思いますという話ではなく、もう率直に、今回、ターゲットになっています駅周辺、駅周りだけじゃなくて、そこからちょっと伸びている1キロ範囲内のところに関して、ご関心のあること、あるいは問題だなと思っていること、あるいはこういうことをちょっと期待しているんだけどもみみたいなことを、まずはお聞きしたいなと思います。

名簿の五十音順で恐縮ですけれども、こちらの名簿の荒井委員のほうから順番にお話をお伺いしたいと思います。早速ですけれどもよろしいでしょうか。

○荒井委員 T. O. Pのメンバーとして、本日、出席させていただいております荒井智子と申します。どうぞよろしく願いいたします。

私は、ふだんは市民活動センターの上にあります男女平等参画推進センターというところで勤務しているんですけども、本日は市民団体のメンバーということで出席させていただいております。

市民団体のほうは、子供、子育て世代によるまちなかの居場所づくりを目指す団体として、「できることからはじめのIPPPO」という団体でございます。

子育て世代のお母さん方を中心として、親子で楽しめる居場所をまちなかにつくりたいと、行政、企業、市民が一体となって、まちをもっと盛り上げていきたいという思いを基に団体として結成いたしました。

なかなか女性たちはライフステージがすぐ変わってしまうものですから、子供も大きくなったりすると、働きに出ていたりですとか、あとは転勤で苫小牧に滞在しているお母さんたちはすごく元気があって、アクティブでいろんな意見ですとか、苫小牧の活性のために頑張ってくれるんですけども、二、三年たつとまた転勤になってしまったのでということで市外に転居されてしまうというところで、私たちの団体も発足から3年ほど経過したんですけども、団体としての持続可能性というのを模索しながら、あとは、ちょっと今、コロナ禍でやはりファミリー層をたくさん集めるという事業を開催することにちゅうちょしてしまいまして、去年はちょっと動きが鈍かったんですけども、日々悩みながら、迷いながらではあるんですけども、いろいろ知恵を絞りながら、みんなで検討しているということの活動としております。

今は、割とCOCOTOMA、駅前にあります公共施設のCOCOTOMAを中心に、アナログゲームという親子で遊べるツールを使って楽しんでもらうですとか、あとはお母さんたちはスキルを持った方が多いのでワークショップをみんなで開いて楽しむというような活動をメインで行っておりました。

やはりご家族が動くとなると、お子さんがちょっと休める場所ですとか、車で来やすい、あとは駐車場が近い、駐車場が無料であればなおよしというような意見が多くて、COCOTOMAを中心に活動しているところではあるんですけども、やはりもっと歩きたくなる、歩ける、あとは公園とか、ちょっとベンチで休めるといったような、お茶を飲んで楽しめる、子供が少し騒いでも気兼ねなく自由にできるというような場所を多く求めている声が聞こえますので、まちなかにそういう場所を展開していけたらな、できたらいいな、あったらいいなということの一つ一つ形にしたいという思いがありまして、「できることからはじめのIPPPO」という団体名にもなっておりますので、具現化に向けて、微力ではありますが、みんなで知恵を絞りながら参画していきたいと思っております。

○森座長 どうもありがとうございます。

私自身も、子供がちょっと大きくなってきて、3人いるんですけど、上はもう高校の半ばに来ている2年生ですけども、昔、一番最初の子供が生まれたときに、子供を私が抱え

て札幌のまちなかで買物をしていたんですけど、当然、おむつを替えるときに百貨店でおむつを替えにいかうとしたら、その当時、男子トイレにおむつ交換台がなくて、「どこで替えたらいいですか」と言ったら、9階の上のところの親子休憩室で普通に替えろと言われます。行ったら行ったで、そのおむつ交換台が授乳室の奥にあるんですよね。すると、入れないみたいな。そここのところで、それ以降、そういう子育て世代の方がどんな場所のところでというようなところを調べたりもしているんですけども、そういったちょっと細かいことなだけけれども、子育ての時期以外のステージに応じて、やはり、それぞれ日常生活が心地よくなるのかって、すごく大事だと思うんですね。

それをやはり、大きなまちだと民間など、何となくそれが整ってくるんですけども、やっぱり地方になってくるとその辺が手薄になって、それが住み続けられるかどうかに関わってくるんだらうというようなことを思いながら伺っていました。

ただ、すごく大事な視点だと思いますので、後ほど、ご意見を出していただきたいなと思います。

それでは、遠藤委員、お願いいたします。

○遠藤委員（代理） 商工会議所の遠藤と申します。今日は、本来の委員であります石森が出張のために欠席ということで代理出席しております。

商工会議所では、この苫小牧都市再生コンセプトプランの策定から、その後の実証であるとか、連携させていただいております。その中でも、7月に行いましたイベントでありますとか、12月に開催いたしました苫小牧イルミネーション（トマイル）のイベントなんか開催しましたけれども、やはり市民の皆様は、何かあれば集まっていただけだと思いますが、集まりたい欲求、本能に近いものがあるんですが、そういったものがここはあるので、何かしら、イベントをやっているよというようなことを常に実施できたらなと思います。

あと、エガオも、先ほど出てきていましたけれども、この委員会で、例えばエガオの跡地に何か建てようとか、そういうものでなく、先ほどご提示ありましたL字型のものをトータルでどういうふうに開発したほうがいいのかというようなことを考えていけたらなと思います。

もう一つの脱炭素であるとか自動運転であるとか、そういった政府の動きとか、民間の動きがあると思いますので、政策なりそういったものを適宜入れていけるような計画、ビジョンになったらいいのではと思います。

それから、歩きたくなるというテーマがありましたけれども、苫小牧は東西に長い都市でございますので、車社会でありながら、相反はしているんですけども、歩きたくなるというようなものもあるかなと思っております。

以上です。

○森座長 ありがとうございます。

よいご指摘をいただいたと思うんですけども、その中で、イベントの話をも最初にして

いただきました。これは、最近のまちづくりのトレンドというところとちょっとおかしいんですけども、今まで、例えば公共でやるといっても、どうしても、形、物として、建物としてお金、予算を出してつくって、それで何かをすることなんですけども、最近、僕も、そういうハード重視の考え方、私、建築専門ですけども、建築じゃない発想の仕方、仮設、テンポラリーなものでどんどん仕掛けていくというようなまちづくりの考え方、すとか、税金の使い方、今イベントをすれば集まるということで、それはすごく大事でいいポテンシャルということなんですけども、もしハードとして固めずにイベントと、やはりそのイベントを誰がずっと仕掛けていくのか、それに対して、どう公共も資金を含めて持続していくのかということがポイントになってくる。これも含めて、駅前周辺のすごく大事な要素になると思います。ありがとうございます。

それでは、磯貝委員お願いいたします。

○磯貝委員 荒井さんと、山口さんと、T. O. Pのメンバーとして参加させていただきます、とまこまいクリエイティブラボの磯貝と申します。

一昨年からまちづくり会社をつくりまして、そういったまちづくり会社を絡めながら、いろいろ中心市街地の発展だったりとか、いろいろ関わらせていただいています。

あとは、CAPも今やって、4ですかね、その2ぐらいのときから、ちょこちょこ関わらせていただいたりとか、主には、私、青年会議所に所属しているんですけども、2016年から、ずっと中心市街地の活性化ということに寄与させていただいているかなというふうに思っています。

そのときに、いろいろなまちづくりの事例など、本当に勉強しましたし、そういったことも踏まえて、なかなかハードの面にはかかわらず、ずっとソフトのところで活動はしてきたんですけども、今回、ハードに対して関わらせていただけるということで非常に楽しみにしております。

今本当に座長がおっしゃったとおりだなというふうに思います。僕は、失敗事例ばかりを見てきたと思いますし、むしろ成功事例なんていうものは、ほぼ存在しないんじゃないかなというふうに思います。それは再現性がほぼないからだだと思いますので、そういう中でうまくやっているなというふうになっているところというのは、どうやって継続させていくかというところは、非常に重きを置いて考えられてるんじゃないかなというふうに思います。

なので、何かを造るということじゃなくて、それをどうやって継続させて、よく失敗事例に出るのは、箱物を建てて、その運営費というか、継続させた分のお金を市民の税金になりまして、経済を回していくというような話ではないかと、ちゃんとそこで稼ぎ出せる環境というものをつくるのが大前提の下で、やっぱりこういったものはつくられるほうがいいんじゃないかなと思っております。

そういった中で、僕自身、T. O. Pのメンバーとして関わらせていただいているということもありまして、やっぱり、なぜ中心市街地に対して、今回何かやっていきたいなど

いうふうに思ったって、やっぱり荒井さんのお話でもそうなんですけど、僕らが小学校か中学校のとき、目的がなくても来ていたんです、駅前に。何か楽しそうだなとか、面白そうだなという。

そういったマインドをどうやってつくっていけるかというのが大前提に含まれなければならないかなというふうに、そのマインドの部分と、あとはどれだけ継続させていくかということが非常に重要なんだなというふうに思っております。

そういった、僕自身はその二つの根拠というものを念頭においた上で策定というのが進められていったらいいんじゃないかなというふうに思っているところです。

以上です。

○森座長 はい。非常にシャープなご指摘ありがとうございます。

特に継続性というのは、本当に大事だと思うんですね。そこに税金を使うのであれば、行政サービスの支援の形もあるんですけども、やはり、もう一つ大事なものは、市民の方々にどう主体的になっていただいて、直接的、間接的にいろいろなポジションがあるんですけども、何らかの形で関わり続けていただく。それは延長上には、先ほど、最後におっしゃっていた、多分、来るだけで結構だと思うんですけど、その辺のつながり、関わり方などをどうつなげていくのか、それはすごく大事なことだと思います。引き続き、よろしくお願いします。ありがとうございます。

○森座長 井上委員、お願いいたします。

○井上委員 皆さん、こんにちは。私は、北海道観光振興機構の海外誘客部におります井上と申します。

このコロナ禍で、私、今年4月で3年目になるんですが、全く海外に行けないという海外誘客部の部長をしております。その中で何をしているのかというと、興味や認知を拡大するための周知を行う事業などをやっております。

海外、実は、すみません、私のことで大変恐縮なんですけど、私、17年前まで苫小牧で働いておりました。出向元、今も出向しているんですが、航空会社の全日空の苫小牧支店におりました。その後、ちょっとある考えがございまして、総合職になって、そこから、今まで17年間、転勤族として、東京、富山、あとは北海道、また、札幌ですとか、釧路におりました。

やはり、どこのまちも人口減少と、どうやって交流人口を増やすか、この問題にやはり直面してしまっていて、私も、いろんなところで交流会にも参加させていただきまして、ちょっとご縁もあって成田さんと会いまして、私は、ほかで話したりするのではなくて、やらなくちゃいけないのはこの苫小牧なんじゃないかと本当に思いまして、何年もずっと生まれ育ったまちですし、ここに対する思いは、人一倍強く持っているつもりです。

ずっと苫小牧の駅を通勤なりで、駅で降りた際に、年々、非常に寂しい思いをしてまいりました。きっと、ここにいる皆さん、三星があってサンプラザがあって、にぎわっていた時代、もっと若いかもしれませんが、多分、知っている方が多いのかなと思います。

やはり、そのイメージがずっとあって、ここまでなくなってしまうたら、もうあとはプラスしかないと思って、本当に何かできないかなというのをすごく感じております。

先ほど、先生がおっしゃっていましたが、行政と民間が手を組まなくてはいけないですし、先ほど荒井さんがおっしゃっていましたが、これにさらに、今市民が加わっているんですね。市民の方たちはもう我慢できないというような、私は、そういった意味では、皆さん、きっとプライドがありますし、きっといい時期に来ているのではないかなと思います。

イベントするのは、非常に重要で、先ほどおっしゃいましたけれども、やっぱりほかに問題は、人が住まなくなったこと、あとは、いろいろお店の方たちも、ここでしかない、ここでしか買えないオンリーワンを作ってこなかったこと、こういうことがどんどん魅力のないまちにしてしまったのかなと思います。

それを逆に返すと、やはりここにもう少し人を住ますこと、そうして商店をまちなかにつくること、それで子供をもっているお母様たちは、ここに来ないとできないことをまちなかにつくること。

私、いろんな世界中というか、日本中、いろんなところを見てきたりしていますけど、面白いなど、最近、函館でキラリス函館さんでしたか、すごく子供が集まるようないろんな体験ができたり、本当にデジタルだったり、面白いものをすごい、平日の夕方にも関わらず人が集まるんですね。こういう場所が苫小牧の中心にもあったら、きっとここに集まるのかなというふうにとちょっと考えていました。

あと、観光客を、私は海外からどうやって人を連れてくるかということを考えているんですけど、実は札幌がやっぱり、今一番多く集まるんですけど、やはり苫小牧って、千歳に非常に近いんで、実はぷらっとみなと市場みたいなどろに行っていたり、実はタイのお客さんも結構来ていたりとか、意外に知らないところで、人って集まっているんですね。ですから、私たちも、もっと面白い何か仕掛けをすると、人は海外でも集まってくるのかなと思います。

隈研吾さんのイメージを見たときに、これはすばらしいと思ったんですけど、多分、そこまでお金かけられないかなと、そう思うんですが、でも、今日本中が、隈研吾さんなんですね。本当にどこに行っても隈研吾さんの建物はありますし、いろんな取組をしているんですけども、私は、隈研吾さんは隈研吾さんですばらしいと思うんですけど、やはり市民の人たちが考えて考えて、考え抜いた私たちだけのオンリーワンをつくり上げていけたらいいかなと思います。

まだ、これからもありますのでよろしくお願いいいたします。

○森座長 ありがとうございます。

たくさんの方の知見、提供いただきまして、ありがとうございます。

これまでのご経験の中で、一番、多分ご経験が多いんだろうかなと思います。これ私の勝手な認識なんですけれども、道内幾つかあって、割とあちこちで語らせていただいている

んですけれども、やっぱり北海道全体、漠然としたイメージとして、北海道だったら観光みたいなイメージが漠然とあると思うんですね。

私は、もともと大阪からで、もうこっちに20年たっていますけれども、大阪だったら、あんなグリコの看板とかをイメージするのかなと考えていたらあれなんですけど、ポテンシャルがあって自信があるという側面があると思うんですけども、その延長上に、割と安易に交流人口を増やすということを掲げられる市町村さんが多いと思うんですね。

でも一方で、交流人口を増やすといったときに、やっぱり、ある程度、交流人口につながる地理的優位性であるとか、ポテンシャルがあるんだと思っていて、どこもかしこも連れてこれるわけではないので、ある意味、厳しい表現かもしれないんですけど、地理的優位性を考えると苫小牧市さんが交流人口を増やせないんだったら、ほかはできないんじゃないかなと思っているんですね。

これだけ空と海を割と支配的に持っているというのは、そんなにないまちなんですけど、ちょっと質問という形で申し訳ないんですけども、苫小牧に来られる、これまでコロナ前に来られている海外の観光客の方は、どういう滞在のされ方をして、狙ってきていたのかなという、ちょっと興味で教えていただきたいなと思います。

○井上委員 私が戻る前なんですけれども、宿泊の国別を見ているときに、タイの方たちが団体で来ていて、それはなぜかという、今後もちよっと消費額が上がって、多少、高所得者ぐらいの方たちも今後来るというふうに読んでいるんですが、その当時というのは、やはり簡単に来れるLCCとかもありましたし、出航便が千歳に入ってきたということで、苫小牧に泊まると安いですね。ですから、そこで、まずここで1泊をして、それこそ海とか、あの辺でちょっと話してとか、あと、今年はもっとアルテンとか、あの辺に連れていけばいいんじゃないかと思ったんですけど、ウトナイ湖とか、道の駅とかには行っていたということは聞いています。あとは中国の方もちょっと来ていたかなと思います。

というのは、私の中では、ターゲットはどこなんだというそれはまた別な考えがあると思うんですけども、外国人も意外に来ていたんだというのは、私は今観光機構に来て分かりました。

○森座長 すみません。ありがとうございます。

交流人口は大事な考え方で、一つは大きな海外を含めた観光的交流人口と、先ほどから出ています、市民同士の交流というのが活性化すると、それはそれで消費にもつながるかなという、やっぱりキーワードになると思います。どうもありがとうございます。

それでは、ちょっと反対側に回りまして、大沼委員、よろしくお願ひします。

○大沼委員 苫小牧信用金庫の大沼と申します。よろしくお願ひします。

月曜日に苫民さんで、この駅周辺ビジョンの記事が一面に掲載されていて責任重大だなと思って見ていましたけれども、冒頭で、学研の小早川さんですか、駅で土産物がない、ショックだったというお話。僕もショックだったんですけど、周りの人はそういうふうに見ているんだなと。

あと、座長から、主体的市民とさっきお話がありましたけども、今日は、僕は、組織という市民として責任をもって参加しなきゃならないという気持ちを新たにしました。

一応、地域に根を張った金融機関なんで、駅周辺の活性化がなければ、その基盤自体が揺らいでしまいます。

中心市街地に本店を構えていますけど、地場としましては、駅前の再整備ということも避けて通るわけにいかないというふうに思っています。

改めてなんですけども、旧サンプラザ、エガオですね。閉鎖からもう7年過ぎている。その間も経済的損失というのは、かなり多かったと思っているんですけど、今さらどういふふうに変えてもしょうがないので、少しでもそれを取り戻したいというふうに思っています。

旧サンプラザに入ってから地権者が多かったんですけど、地権者だったという人が多くて、この方たちはもともと中心市街地で古くから商い営んでいたんですけど、今ここでも営んでいる方たちはいます。その方々も含めて、一番、信用金庫として、いろいろな絆を築いてきたものですから、そういう方の代弁者でもありたいという気持ちはあります。

あとは、半径1メートルですけど、市民ホール、先ほどPFIという話が出ましたけど、そちらにも指定金融機関として関わらせていただく予定がありますので、今後、駅周辺ビジョンがどのように策定されていくのかというのは、そのプロセスに関わるというのは非常に大きいというふうに思っています。

あと、さっき交流人口というお話がありましたですね。交流人口を増やすというのは非常に難しいし、どの自治体も苦労しています。

ただ、和歌山のどこだったかな、交流人口のないことを前提でまちづくりしているところもあるんで、その辺いろいろな工夫ができるかなというふうに思いますし、先ほど、井上さんがお話しになった隈研吾さんの話ですね、隈研吾さん、北海道に非常に関わりがあるんで、これも何かのチャンスだと思いますんで、この機会を逃したら次はないのかなというような危機感を抱いています。

函館の先ほど、キラリスのお話がありました。とりあえず僕も見てきたんですけど、これ、産業、いろんな試みがあって非常にためになると。デジタルに特化していてすごくて、あれソニーでしたっけ。関わっているんだよね。ああいうのもあればいいなと僕も個人的に思っています。

あと、最近ですけど、日本語学校も来年の春にオープンするというので、海外の交流もさらに加わってくると思いますので、いろいろ識者の意見を聞かせていただいて、関わっていきたいと思います。よろしくお願いします。

○森座長 ありがとうございます。

実は、私も、この間、子供を連れて函館に、あそこで遊んできたんですけども、かなりテクノロジーに振っているんで、そこでのお金というイメージはあるかなと思うんですけども、でも、真ん中に子供と行きたいなとかと思える場所があるということと。あと

は親の立場でいくと、自由にできるのはすごくいいなと思って、あれはあれで学ぶところがあるんだなと思っているところです。

あと、今もお聞きしながらやはりつくづく思ったのは、やはり、ご商売をされている方が、ずっとこのまちを見てこられているので、そういう見てこられている方々の経験というのは、ぜひとも生かしていきたいなと思うところと、もう一つ、苫小牧市さんがというところではないんですけども、一方で、かつてはこうだったというのに引っ張られ過ぎると、それはそれで具体的なビジネスのスキームも過去の延長上みたいなのところになってしまうところもある、割と見てきているところがあるので、その辺りをこちらのこの見解を含めて、議論とやはりご商売されている方々の知恵みたいなのところと結びつくようなものがあってほしいなと思うところでもあります。引き続き、よろしくお願いいたします。ありがとうございます。

それでは、千寺丸委員、お願いいたします。

○千寺丸委員 社会福祉協議会の千寺丸といいます。よろしくお願いいたします。

私は、社会福祉協議会で生活支援コーディネーターという仕事をしています。

主に65歳以上の高齢者の生活支援体制整備をどういうふうに整えていくかということをやっております。

今まちの中なんですけども、実は、僕は錦町出身なんで、本当にまちの中で育っております。なので、先ほど磯貝さんが言ったように、まちのほうでは誰かいるというか、例えば、僕が、ダイエーと呼んでいたんですけど、サンプラザ、エガオ。ダイエーに行けば誰かいるというような形で、子供時代、遊んでいました。そういう、ちょっとまちの中、非常に今寂しいということは、社会福祉協議会の仕事とは別に本当に感じております。

それと、あと先日、先週ですけども、駅前で野良猫が何匹かいて、その捕獲大作戦ということで、私も捕まえるために3時間、4時間、外にいたんですけども、ずっと駅前にいて、ここに何があったかなとか、いろいろと考えながら駅周辺を歩いていました。そんな中で、例えば駅前通りが、昔、本当にいろんな人が歩いていて、子供からおじいちゃん、おばあちゃんまで交流するような場所が本当に多かったかなというふうに思い出しています。

あと、この生活支援コーディネーターの仕事として、いろいろ、今中心部の方の高齢者問題を聞いて回っています。おじいちゃん、おばあちゃんからは、本当に地域のおじいちゃん、おばあちゃんが集まる場所がないということも、相当な数の方から聞いておりますし、今コミュニティソーシャルワークということで、若年層の支援ということもやっているんですね。ひきこもりだとか、不登校の子供たちのお話も今いろいろと話を聞いてる中で、そういう子たちが気軽に集える場所、集まれる場所、そういうものも複合的にあれば、まちの中に少し人が残ってくるのではないかということも感じております。

あと、今交通の問題で西側と東側でいろいろと交通の利便性がないということで、移送支援とかも、今始めております。そういう方々も中心部に來る手段が今ないということも

あるので、そういうことも含めて考えていければなということがあります。

あと、今その移送でトヨタさんからレンタカー的な車を借りて移送サービスをしているんですけども、トヨタさんが小型のモビリティについて、イベントとかで使いたいんですけども、そういうイベントがあったら、ぜひ紹介してほしいとか、そういう話も、今いただいています。

実際に、このトヨタのディーラーさんにそういう小型のモビリティを展示しているんですけども、それをちょっと体験的にうちの事務局長が乗って見たんですけども、海岸のところだと乗れるんですけども、駅前通りのようなところで乗るといのは、なかなか厳しいんじゃないかと。これがもし高齢者が乗るんであれば転倒のおそれがあるんじゃないかとか、いろいろ乗って見たら課題があるねとかという話は聞いております。

そのトヨタのモビリティは、すごく近代的で、それが車椅子と合体すると車椅子が電動化できるようになったと、昔の僕たちが子供の頃に出ていたロボコンのアニメみたいな感じで、ガチャンとくつつくみたいな感じでなるといことも、今のトヨタさんから聞いておりますので、そういうものが、今年出るということを聞いております。

そういうものも高齢者の方々に体験していただいて、こういうものがあったら出かける機会が増えるんじゃないかというような形で説明できるかなと思っています。

あと、僕個人的に今は社会福祉協議会なんですけども、その前の仕事が市民会館で舞台の仕事をしていたので、25年ほど舞台の仕事をしていたんで、市民会館がどういうふうであるのかなという、そこの動線も含めて、駅前から市民会館への町並みをいろいろとこれから一緒に考えていけるかなと考えております。よろしく願いいたします。

○森座長 ありがとうございます。

後半に重点的にお話しいただいたモビリティ、私もすごく大事だなと思っていてまして、今回、駅周辺になると、かなり面的な広がり1キロの範囲の話なんですけれども、この議論がいわゆる駅前に集中するといのはまずいなと思っています。

駅前のことを考えるにしても、この1キロの範囲内がどうなるのかということが考え抜かれないと、駅前をどうするかという話になると思っていてまして、その一つのキーポイントはやっぱりモビリティ、移動だと思うんですよね。

ウォーカブルというのは、割とはやりで、どこもかしこもみんな言っているんですけども、自分の力で歩けるといのは、まず一番いいことなんですけれども、やはりお年寄りのことを考えたりすると、そうではない側面もある。

私が大事だなと思うのは、自分の足で歩くところも必要なんですけれども、移動する手段のバリエーションがどれだけ増えるのかというのがすごく大事だなと思っています。

例えばのお話で、次回以降、また交通の話が出てくると思うんですけども、札幌も市電がありまして、ループ化します。日本もいろんな日本各地で、また、富山さんなんかも路面電車のあれで有名ですけども、路面電車を回せばオーケーではなくて、私は、常々、あちこちで言っているんですけども、そもそも路面電車を利用する運賃の仕組みが、例え

ばドイツとフランス、例えばストラスブールが代表的ですけども、日本と全然違うんですよね。

あちらの路面電車でのまちづくりって盛んになって、中心市街地に人が増えたときの運賃というのは、切符を確認しないんですよ。なので、信用乗車方式で、もう買っているという前提で乗ってくる。だから、どこで乗ろうか、降りようか、誰も一々お金を払わずに、絶えず乗り降りできるんです。

なので、どんどん降りて乗って、降りて乗ってということですけども、日本は1回ごとに運賃を払って、車掌さんがチェックする。そこをやっぱり変えないといけないかなというのは、すごく感じているんですよ。

結果的にヨーロッパのほうは、一々チェックして料金を払うお金を考えるとしたら、もうフリーにしておいて、ただ、抜き打ち的にやったときに刑務所にというやり方をすることが効率がいいという話なんで、結果的に、100メートル単位ぐらいで路面電車が止まって、そのたびにショップで買った人が一人で乗って、また降りるということを繰り返しているんですね。そのモビリティの手段のツールだけ与えるのではなくて、それをどう公共サービスであるとか、市民の利用に対して、どういう仕組みで提供するのかというのも、これからすごく考えていくポイントになるのかなというふうに思っています。これはまた次回、次々回では、ぜひ交通のところ、皆さんと議論したいなと思っております。

ありがとうございます。

それでは、山口委員。最後になりますがお願ひします・

○山口委員 ありがとうございます。山口勝次と申します。私は、株式会社トート一事務機という事務用品屋を経営させていただいています。2017年ぐらいですかね、森先生と市民ホールのワークグループのほうで一緒させていただきまして、いろいろ議論させていただきました。

今まちなかイベント広場実行委員という部分で、駅前のホコ天を年1回開催させていただいて、今年で5年目になります。主に音楽イベント、あとはストリートのダンスですとか、スケボーのキッズなんかを呼んで、社会福祉協議会さんのご協力をいただいて楽しませていただいています。

主に本当に10代で、幼稚園から高校生、たくさんの子供たちが当日は路上にチョークで絵を描いたりとかですとか、去年は玉入れをやったりとか、かけっこをやったりとか、急遽決まった企画なんですけど、市民の若い子たちが、あの場所で、笑顔でおじいちゃん、おばあちゃんも含めて遊んだ姿に何もないうち苦小牧って本当に諦めていたところだったんですけど、可能性を感じた去年のイベントだった記憶があります。

私は、札幌の北区の太平という、ど田舎の出身でして、23歳のときに島流しに遭いまして、苦小牧に、今住ませていただいています。

今年で20年住み着いております、私の尊敬する札幌の経営者の方で、「ハブになる」というキーワードを持った経営者の方がいらっしやいまして、私も苦小牧で人と人とをつ

なくハブになりたいなと思いつつながら、日々、経営をさせていただいています。

昨年2月に地域のウェブサイトの「まいふれ苦小牧」というウェブサイトを千葉のフランチャイズの権限を買って、苦小牧まいふれというのを運営させていただいています。

FM苦小牧さんですか、苦小牧って、結構、いろんなところで個々にぼんぼんとやる方が多いなというのを結構昔から思っていたんで、そこをうまくつなげる立場でやれたらなと思っております。

今後、デジタル化ですか、スマートシティだとか、アナログでラジオの部分とかいろんな本当に可能性があると思いますんで、そこをうまく取り入れながら、こちらの策定の委員会のほうも頑張っていきたいなと思っております。よろしくお願ひします。

○森座長 ありがとうございます。

先ほど、一度出ていましたイベントの話ですね、みんな、実際にいろいろと仕掛けられているということで、そういう活動がやはりこの駅周辺の中で持続的に魅力的に生きるような在り方というのが、ハードと結びつけていきたいなというふうを考えているところです。

市民ホールのおきも、皆さんはご存じないかもしれないですけど、基本構想書という、基本計画書があつて、基本計画書の約半分は活動アイデア集というふうになっているんですね。また、お時間があれば見ていただきたいんですけども、その活動アイデア集というのは、ワークショップを重ねながら、ホールができたならどんなことをやりたいというアイデアがすごい数集められていて、それが、このとまチョップのキャラクターのイラストでいっぱい集められているんですよ。

あの部分も、やっぱり箱でホールができてという話がいっぱいあったんですよ。

どういふ活動を、皆さんしたいですかというの、その当時は、イオンさんにご協力いただいて、イオンのモールの真ん中で、模型を置いて、アイデア集のパネルをざつと並べていて、人気投票とかをやったりですね。そういうようなことをやったものがそこに載っています。

だからという話ではないんですけども、やはりその当初から、苦小牧市の中でも、この活動ということなんですかね。こういうことをやりたい、こういうアクション、アクティビティをもっとやりたいということは、やはり皆さん関心もあつて、それを実現していく仕組みというのが、ホール、今度の新しいホールはすごく大事になってくるかなと思います。ぜひ、興味があればですけど、見ていただきたいなと思いますので、お時間のほうを取って頂ければと思います。ありがとうございます。

そうですね。一通りご意見をいただきました。私がしゃべっている量が多く恐縮なんですけども、ただ、私も今回の駅周辺ビジョンで思っていることを少しご紹介したいなと思います。

まず今回、これは駅周辺ということなので、駅前集中的、オンリーではないということの前提ではあるんですけども、かといって、一方で、メディアでも出ていますが、市民

のご関心というのは駅前ここにある。この再開発と言われる形が、特に駅前においては、全国各地で、恐らくですけれども、この再開発というのはすごく難しい時代に来ているなと思っています。

基本的に土地を整備しながら建物を建てて、再開発、更新して、収益を上げるというのは、基本的には人口が増えてきた高度成長のときに乗っかっていく仕組みになっていると思うんですね。

その高度成長期に編み出された一つの方法が再開発の手法でちょっと専門っぽくて申し訳ないですけども、都市計画法と言われる、何十年もずっと変わっていないんですけども、基本的に人が増えて、まちが大きくなる前提でつくられているところですので、そこでやっているのは、民間の再開発をプッシュするために、容積率ボーナスとして、ここ、こういうようなことをやったら容積を増やしてあげますんでどんどん建ててくださいねというのが都市計画の伝統的なやり方ですね。その仕組み自体が、残念ながら、今この時代に全然変わっていないところなんですね。

なので、全国各地で駅前を中心にフリーズするというのは、それに変わるようなやり方が見つかっていない。今までどおりやったら絶対採算が合わないというか、回収できないということになる。そうなったときにどうするのかということを考えていかないといけないのであって、その一つのチャレンジは、苫小牧市さんでぜひやっていただきたいなど、私の個人的な関心になります。

やはり、そのときに、地方になればなるほど民間オンリーでやるということが難しくなってくるので、どうしても公共が絡んでくる。公共と一緒にやってやることになるんですけども、一方で、公共と一緒にやってくれるということは、札幌のど真ん中みたいに民間で収益が上がるようなことを考えるより、それに税金を投入しますので、それがどう公共性を持つのかということを考えないといけないなど。

その辺りは、今回、駅周辺を考えたときに全て民間で自由という形ではなくて、公共が、恐らく積極的に何かしら関わることになる。そうすると、やっぱり納税されている市民の方々にどういうふうな形で日常生活に還元されるかというのがすごく大事だなど。ちょっと大きな話で申し訳ないんですけども、そういうところ、再開発ということに関しては思っておかないといけないなと思っています。

2点目ですね。今は学会的にも都市部の再開発というのはすごくホットな話題になっていて、何がホットかというところ、これで大丈夫なのかという議論なんですね。私、札幌から、今来ていますが、札幌でばんばん再開発やっているんですけども、学会とかで盛り上がっているのは、今から人口が減っていくのに、今以上の床面積の建物を造ってどうするのかという話が出ているんですね。ある程度の時間、たとえ10年、20年、25年、30年ぐらいまでの期間でいくと、当面の事業で、例えば札幌だったらコールセンターの需要が高いので、オフィスが埋まりますとか、マンションを建てたら、それなりに売れますよということで容積が減って縦が伸びているんですけども、そういうふうには造られた建

物というのはずっと残り続けていて、50年、60年、80年たってきたときに、それが全部残っていったときに、全部埋まっているのという話がやっぱり出てくる。その辺りで、負のレガシーになりかねない再開発というのは、次の孫の世代を考えると、やはり冷静に考えるべきことかなと。

この容積の考え方ですね。今までは、ハードの容積、例えば床面積、ハードの容積をつくって、そこでどうやってお金がもうかるというやり方をしていたと思うんですけども、このハードの容積から回収するというような仕組みじゃなくて、先ほどの利便の話がありましたけども、ソフトも含めた形で、駅前とか、駅周辺環境の価値を上げていくにはどうしたらいいのかということになる。そこにチャレンジしたいなど、日頃、思っています。

大学の授業で、割と毎年のようにしゃべっているのが、昔、釧路のほうで、釧路駅から端まで全部、駅前のシャッターが下りているところ、あれ全部セントラルパークにしたらどうですかという提案をしたことがあるんですけども、ニューヨークのセントラルパークのあの際にある、日本語でいうマンションがものすごく人気で、空きがなくて不動産価格が上がるんですよ。

それは何かというと、目の前にグリーンがある。ニューヨークのど真ん中でグリーンがあったら。百貨店があるからいいという話ではなくて、この価値の持たせ方というのは、決して一つの発想ではないかなと思うので、そういったことも考えていくのは大事なかなとっております。

三つ目ですね。先ほど、駅前の話から出てくるんですけど、先ほども1キロの範囲内を考えたときに、どうしても、今までの、私も昭和生まれなんで、昭和的に考えて、駅ビルを中心的にちょっと考えがちなところがあるんですけども、私自身は、駅を中心にして同心円状にグラデーションがずっと薄くなっていくという時代ではないと思っているんですね。

結局、その昭和的な駅中心型、駅にスポットを当てて、そこにきゅっと集中的に何かを持ってきて、そこに全部引っ張っていくことなんですけれども、そうではないやり方を地方はもっと考えていかないといけないのかもしれない。これはもうだから、私自身も含めて、昔のにぎわいみたいなものを、かつてそうだったからという話ではなくて、それを切り替えていく勇氣というのにも必要かなというふうに。

その辺の分かりやすい言葉が、ヨーロッパでも人口減少したまちを再生するとかという言い方をしているんですけども、ヨーロッパなんかで観光に行くと、「旧市街地」と「新市街地」という言い方をよくするんですね。

私たちの日本の国で「旧市街地」と表現しているまちは、全然ないんですよ。

この旧市街地というのは、古い市街地という意味じゃなくて、ヨーロッパのまちのいいところは、旧市街地はかつて栄えていたんだけど、今は役割が変わって、こんな魅力のところですよという意味合いを込めて「旧市街地」と言っているんですね。

何で、日本で旧市街地というのを自信を持ってつukれないのかなというのを思っていた

りするんで、もしかしたら、今までのJRの駅前というのは、かつての商業の中心だったかもしれないけれども、これからの、このエリアというのは、いい意味で旧市街地を意味するという形で価値転換をして、そういうようなことも考えていったらいいなということで、今回のこの検討委員会を楽しみにしているところです。

すみません。私の話が長くなりましたけれども、多分、時間も限られていると思いますので、今一通りご意見をいただきました。もし、委員の皆様から、ここをもう少し聞きたいんだけど、ここ興味がありましたというところがあれば、ご意見をいただきたいなと思います。

いかがでしょうか。

今日は、私もキックオフであり手探り状態で、しっかりとやっていますので、ちょっと分からないところありますけれども、どうでしょう。

それでは、いいですか。まだ多分、事務局のほうも、次回以降はどうするかというのはクリアではないような気はするんですけども、今日は一通り、委員の皆様の主な関心どころというのが出てきたと思います。

今日の、この事務局から用意いただいたカラーの横の3ページ目で、第1回、第2回、第3回、4、5とありますけれども、これも私の提案を含めてなんですが、漠然とした思いを語り合うという、ちょっとぼやとした話になりそうだと思うので、論点を一つ、毎回、持って進めていくのがいいかなと思っています。

それと、もう一つは、苫小牧の中だけのことばかり考えていると、ちょっと相対化ができないので、ちょっと事務局のほうに頑張ってもらって、相対化できるような、ここはこんな感じで、ここはこんな感じでというようなこと、先ほども函館もありますけれども、ネタとして持ってきていただいて、それに関して意見交換をするというのがやりやすいかなと思います。

この辺りはちょっと事務局のほうで決めていただきたいと思いますが、次回、次々回ぐらいは、トピックをちょっと決めて、情報を共有しながら議論をするという形で進めさせていただくということによろしいでしょうか。

はい。ありがとうございます。

例えば、ちょっと、私、関西にいと、苫小牧市さんの、この地理的な形状というのは、関西にいと、私、兵庫の一番端の尼崎市というダウンタウンの出身地なんですけれども、あまり昔は評判がよくなかったまちです。

京阪神とって、すぐに山と海に挟まれた細長いところが地形なんですよ。なので、長いというのにはそんなに、私自身、違和感はないんですけども、ただ、人口の密度全然違うというのは当然あるんですけども、その中で細長いんですけども、日常生活的にいうと、東西に長いんですけど、南北の流れというのがやはりすごく大事な気がするんですね。

それは、すぐちょっと行けば山があって、ちょっと行けば海。その南北の流れというの

が日常生活上すごく大事で、それがそれぞれのエリアごとに個性を持っていて、鉄道でつながっていたりというのがこの京阪神と言われるエリアなんですけれども。

なので、この今回やろうとしている駅からという話は、私としては、感覚的にはすごい分かりやすく、ただ、その南北の流れみたいところは、始発と、始点と終点があればオーケーではなくて、間に何が挟まってくるのかというのがすごく大事で、ここが今回、この1キロという、決してすぐ歩ける距離ではないので、この間というのをどういうふう考えていくのかということも同時にディスカッションしていきたいと思っています。

それでは、次回以降、今お話しした内容で、皆さんと意見交換していきたいと思います。

これらについて、事務局から、その他というところも含めて、少し連絡、ご説明があればお願いしたいと思いますが、よろしくお願いします。

○事務局 森先生、ありがとうございます。皆様、キックオフという初回にもかかわらず、皆様の様々なお立場からのご意見いただきまして、非常にありがたいと思っております。

そして、森先生からいただいたとおり、次回できる限り、資料として準備させていただきまして、事前にできる限り早めにご提供させていただきながら、一度、目を通していただいて、活発な議論につなげていければなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今の段階ですと、6月というところで予定してありますので、この日程の調整のほうもできる限り早く行いたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

今日は、特段、その他というところはございませんが、引き続き、皆さんからのご意見をいただきながら進めてまいりたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

それでは、お時間になりましたので、以上をもちまして、苫小牧駅周辺ビジョン策定検討委員会第1回を閉会させていただきます。

皆様、本日はどうもありがとうございました。お疲れさまでございました。